

# 現代社会のグランドデザインを考える

## 1. はじめに ～本勉強会の目的・分析手法～

### ①目的

- ・講演会に向けた基礎知識の共有(ポストモダニズム、管理社会論など)
- ・不透明な未来に向けての秩序構想(現実空間レベル、サイバー空間レベルおよび相互の関係性)

### ②分析手法

- ・近代化論、ポストモダニズム、管理社会論、社会システム論など

## 2. 「近代化」の構成要素とそれを可能にする諸条件 ～富永健一の考察を中心に～

広義の近代化…(I)「産業化」=経済的近代化(Aシステムの近代化、ヴェーバーの意味での「資本主義の精神」)

⇒自律性・効率性の高い組織による経済活動により「近代経済成長」を達成するメカニズムが確立

(II)狭義の近代化①政治的近代化=「民主化」(Gシステムの近代化、近代民主主義政治の確立)

⇒大衆的レベルでの民主主義的基盤による政治的意志決定、その下での専門的官僚制組織による実行

②社会的近代化=「自由・平等の実現」(Iシステムの近代化、近代法システムの確立)

社会集団が血縁的・包括的親族集団から機能的目的組織へと変化

地域社会が閉鎖的村落ゲマインシャフトから開放的地域ゲゼルシャフトへと移行

⇒機能分化・普遍主義・業績主義・手段的合理主義などが制度化

③文化的近代化=「合理主義の実現」(Lシステムの近代化、人間理性の要求)

伝統等の非合理的な拘束からの解放と思想などの合理主義を求める文化変動

⇒科学及び科学的技術の制度化とそれらが自律的に進歩するメカニズムが社会システムに組み込まれ、教育の普及により迷信や呪術や因習などの非合理的な文化要素の占める余地が小さくなる

### 非西洋後発社会の近代化を可能にするような諸条件

(I)近代的価値の伝播可能性の度合い(A→G→I→Lの順に伝播可能性の度合いは低くなる)

(II)近代的価値を受け入れる動機づけの度合い(A→G→I→Lの順に動機づけの度合いは低くなる)

(III)近代的価値を受け入れるにともなう引き起こされるコンフリクトの度合い

(A→G→I→Lの順にコンフリクトの度合いは大きくなる)

⇒西洋における近代化は、社会的近代化(氏族の消滅や自治都市の興隆)と文化的近代化(ルネッサンスと宗教改革)に始まり、政治的近代化(市民革命)、経済的近代化(産業革命)の順に起こった。日本を含む非西洋後発国の近代化とまったく逆である。よって近代化途上において経済的近代化や政治的近代化に歪みが生じた。その兆候は、国民の近代化要求に対する政府権力の抑圧とその結果生じる全体主義的支配等である。

## 3. ポストモダン社会の特徴とその構造 ～東浩紀の考察を中心に～

①「全体性の喪失」(例:リオタール『ポスト・モダンの条件』1979年)

多様な知識を統一する「大きな物語」への不信感、共認不可能な言語ゲームの乱立

(=文化の断片化、サブカルチャー化) →「小さな共同体の乱立による大きな物語の凋落」

②「現実と虚構の相互貫入」(例:ボードリヤール『消費社会の神話と構造』1970年)

消費を動かしている基本的な原理は記号的世界の自律であり、商品の世界での自律性

「現実を覆い尽くす記号的世界、シミュラクルの全面化」→社会現象の虚構化

③「規律訓練から環境管理へ」(例:フーコー『監獄の誕生』1975年)

近代的主体:自分がいながら自分で自分を監視するという、二重化した存在

→「主体の自己統御への依存から環境と身体の直接的な管理へ」→秩序維持の質的变化

### ポストモダン社会の二層構造とそれをつなぐもの

①多様性の層：シミュラクルの戯れによる小さな物語が集合した消費社会のレベル → 社会現象の虚構化

②断片の層：物語なき情報が集積し、知の断片化が生じる → 全体性の喪失

→その断片がさまざまな物語として結晶化する際に、その結晶化がお互いに衝突を起こさないよううまく情報管理する。つまり、情報流通を制御し、環境管理をして、フィルタリングしていく中で、秩序維持の質的変化が起こる。

## 4. 管理社会論や情報社会論の問題認識 ～中野収とレッシングの考察を中心に～

近代社会：抑圧と非抑圧、監視とプライバシーという対比関係があり、管理する側と管理される側のダイナミズムによる社会的な葛藤

ポストモダン社会：個人情報に委ねて社会空間に接続するか、社会空間から切断されて、自分の中に閉じこもるかという社会的葛藤

→人間が集合し続ける限り「管理」という形態はなくなる

旧来の管理：人格内に内面化した道徳意識、倫理感に基づく管理（規律訓練型管理）

情報化が生み出す「超管理社会」：ルールを外面化、マニュアル化した、交通システム型の管理（環境管理型管理）

→管理が不可欠なものとすると、情報化がもたらす管理は、内面的なものを中心となるのか、外面的（マニュアル的）なものを中心となるのか。

### 管理社会のイメージとその問題点

①高度に発達した中枢管理機能によって個人が完全に管理されている、自由もプライバシーもない超近代的な全体主義国家のイメージ

②単に情報処理能力が著しく高度化し、コミュニケーションのネットワークを通じて計画や統制がきちんとなされている、クールで合理主義的な社会

③発達した情報ネットワークを利用して、社会のなかの個人、集団、サブシステムが相互に他者を管理しようと競争する、相互管理の分権的イメージ

④「高度の選択の自由が享受され、社会の各成員が多面的な価値や目標をそれぞれに思考しつつ、複雑な利害対立を調整し、社会問題を高度に処理していくような、最適管理の行われているイメージ」

- ⇒ ①「管理の主体」の問題  
②電子化された管理を解釈するのは誰か  
③「管理の民主化、あるいは分散化」をどう評価するか

### レッシングの社会統制の4つの方法

①威嚇的命令：法規制で統制

②市場：市場価格の上げ下げ等で統制

③規範：学校教育等で統制

④アーキテクチャー：システム設計で統制

（法と規範＝規律訓練型権力、アーキテクチャー（と市場）＝環境管理型権力

①威嚇的命令<②市場<③規範<④アーキテクチャーの順で不自由感は減る）

現在の所、アーキテクチャーは技術者によって比較的目的の課題を解決するために社会に導入されており、法律のように、事前に立法機関で国民の代表が議論をし、伝統的に認められた手続きで合意をした上で制定されるような手続きは整っていない。

⇒社会で重要な技術的アーキテクチャーは、ある程度設計プロセスにオープンで民主的な手続きが必要ではないか  
「環境管理型社会における公共性とは何か」という問題

## 5. 現代思想家の問題意識 ～岡本裕一郎の考察を中心に～

### ① ドゥルーズとフーコーの問題意識とその問題点

両者の共通意識「効率的に管理する社会にどう対抗するか」

#### ドゥルーズ

「リゾームがふさがれ、ツリー化されてしまったら、もうおしまい、もはや何一つ欲望から出てきはしない。なぜなら、欲望が動き何かを生み出すのは、つねにリゾームを通してなのだから。欲望がツリーにしたがうと、必ず内的な下降が起こって、それが欲望を頓挫させ、死に導く。ところが、リゾームは外的かつ生産的な勢いによって欲望に働きかけるのだ。」

ー 序列システムの「ツリー」と、多様性・非等質性を原理とした解放モデルの非中心化システムの「リゾーム」

「本質的に脱コード的で自由であるはずの欲望が、どうして管理を求めるのか」 ー 「欲望のパラドックス」

#### フーコー

「欲望のあるところには、すでに権力関係が存在するはずだ。したがって、後から行使される抑圧のなかに権力を告発するのは、幻想にすぎない。そしてまた、権力の外で欲望を探し求めるのも、虚妄なのである。」

ー 革命的な活動を行っても、権力から逃れることはできず、「権力のネットワーク」のなかに組み込まれる

「権力はあらゆる瞬間に、あらゆる地点で、というかむしろ、一つの点から他の点への関係のあるところなら、どこにでも発生する。権力は至る所にある。」

「権力のあるところには抵抗がある、そして、それにもかかわらず、というかまさにそのゆえに、抵抗は権力に対して決して外側に位置するものではない。」

「管理された権力関係から、いかにして自由な主体が生じるか」 ー 「権力ネットワークのアポリア」

### ② ネグリとハートの問題意識とその問題点

理論的出発点：フーコーの「生政治」やドゥルーズの「管理社会」

「ポストモダニズムの差異の政治は、最良の意図を持ちながらも、〈帝国〉的支配の機能や実践に対しては、無効であるばかりか、それらと合致し、それらを支えるものにさえなりうるのである」

ー 「差異性」を組み入れた「統一体」としての〈帝国〉による支配

「マルチチュードとは多数多様性のことであり、諸々の特異性からなる平面、諸関係からなる開かれた集合体のことである。マルチチュードは、均質なものでもなければ自分自身と同一のものでもなく、自己の外部にあるそれらの特異性や諸関係を別個のものとして区別せずに、それらと内包的な関係性を持つ。これとは対照的に、人民は、自己の外部にとどまり続けるものとの差異を呈示し、またそれを排除しながら内的な同一性と均質性をめざそうとする。マルチチュードがいつまでも閉ざされることのない構成的な関係性であるのに対して、人民は主権のために整えられたすでに構成済みの統合体なのである。」 ー 革命的だが自由なアソシエーションである「マルチチュード」と反革命的な「人民」

「ドゥルーズとガタリは、私たちが行うべきは資本のグローバリゼーションに抵抗することであるよりはむしろ、そのプロセスを加速させることなのだ、と論じていた。・・・私たちは、そのような挑戦に応じ、グローバルに思考し、グローバルに行動するようにならなければならない。グローバリゼーションには対抗ーグローバリゼーションをもって対決すべきであり、〈帝国〉には対抗ー〈帝国〉をもって対決すべきなのだ。」

ー カウンターグローバリゼーションの必要性和それを可能にする「マルチチュード」の存在

〈帝国〉論の問題点：

- ① 〈帝国〉の形態、「マルチチュード」の形態が非常にあいまいなままである
- ② 反革命的で管理主体の〈帝国〉と革命的な「マルチチュード」の二項対立に終始し、相互の移行可能性がない
- ③ 情報技術への言及が極めて少ない

## 6. 社会システム論の展開 ～友枝敏雄の考察を中心に～

### ① (パーソンズによる) 前提としてのシステム概念と社会秩序問題の説明

「システムとは、関係についての明白な諸規則をもつ部分、構成要素、また諸過程間の相互依存と、その複合とそれを取り囲む環境との間の相互依存の種類の両方を指し示す概念である」

システム概念：社会の構成要素は個人であり、個人あるいは個人の組織化された集合である諸組織の集合が社会である  
⇒部分を論じる際にはすでに全体性が前提として存在し、部分の中に全体性が見出せる

「社会秩序問題」…

「一つは、コミュニケーションを可能にするシンボル体系の秩序であり、もう一つは、期待の規範的側面に対する、自我と他我の動機指向の相互性に関する秩序の問題であり、「ホッブズ的」な秩序の問題である。」

「パーソンズ行為理論の第一命題、すなわち文化パターン・パーソナリティへの内面化と社会体系への制度化は、まさにこの問題に対するパーソンズの解答であった。」

「こうして、秩序の問題、したがってまた、安定した社会的相互行為の体系、すなわち社会構造の統合の性質という問題の焦点は、行為体系を、この文脈では個人と個人のあいだを統合している規範的な文化的基準と、行為者の動機付けとを統合することにある。」

### ② パーソンズの問題意識とその問題点

「主意主義的行為理論」：個人の主体的・能動的行為を導く根幹はその個人の抱いている価値基準であり、この価値に準拠して方向性が意志的努力によって与えられる。

「行為とは、行為者がある状況の中で、一定の規範によって規制される仕方で、エネルギーまたは動機を、目標達成のために消費することである」

→ダブル・コンティンジェンシー（二重偶然性、二重の依存性）の問題

人間が相手の場合、我々は、我々がある行動をとるだろうと相手が予期しているだろうと予期して、行動する。

このような偶然性を乗り越えて、行為をうまく調整するためには、「社会的規範」「文化的パターン」が必要である。

### パーソンズのシステム論の機能の4類型とその制御媒体

- |                            |                  |               |
|----------------------------|------------------|---------------|
| ① 適応機能(Adaptation)         | …外部との関係で必要な資源を調達 | (経済システム)      |
| ② 目標達成機能(Goal attainment)  | …全体に共通の目標に向かって指導 | (政治システム)      |
| ③ 統合機能(Integration)        | …内部の部分間を調整       | (社会システム)      |
| ④ 潜在機能(Latency)またはパターン維持機能 | …全体の基本的なプログラムを維持 | (文化的価値体系システム) |

<制御媒体>

貨幣  
権力ないしは票  
法による刑罰  
記号によってシンボル化された価値

<サブシステム>

経済  
政治  
社会  
文化

社会システムの一般理論を模索したパーソンズは、機能の概念を中心に、人間の行為に特有な文化的コード（シンボル）を組み入れて、サブシステム間のアウトプットの交換として、そのダイナミズムを解説しようと試み、社会システムの構造と機能を概念化した。

⇒行為についての主意主義的理論を維持しつつ、他方で行為の連関をシステム理論で考えようとする。ここにかれの理論の内的な矛盾がある。なぜなら、行為を他の行為との関係の中で説明しようとするシステム論は、行為についての主意主義的な理論、つまり行為を目的合理性をもった活動として捉えようとする理論とは、矛盾するからである。また、システムを環境に対して境界を維持するような定常的な結合体と捉えたために構造を前提とし、その維持の要件として機能を論じることになり、社会変動においては弱いとされた。

### ③ルーマンの問題意識とその問題点

システムの構造：環境との関連においてのみ成り立ち、システムは環境の複雑性に対しシステム内の複雑性を高め、それを通じてシステムと環境との差異を減少させることによって境界を定め維持する。

→パーソンズの行為理論を徹底化するために意味概念を重要視する。その中でも、意味を生み出す側面ではなく、意味が作用する側面に注目する。意味は、「人間の体験の秩序形式」ないし「体験処理の形式」であり、「意味による体験処理の固有の独自性は、複雑性の縮減と維持を同時に可能にする点にあ」り、意味による体験処理の重要な契機として人間の否定の能力に着目する。「意味を構成する体験においては肯定よりも否定が機能的に優位する」

⇒環境の複雑性つまり選択可能性の過剰な創出、その中での選択の遂行、その選択された可能性の安定化という一連の過程によるシステム自体の複雑性の増大を招く。このような社会を導きうるのは、情報処理能力を高め自律した政治体系・計画的官僚の行為であり、一般の人々の行為ではない。この議論は、人間の意志を離れて自己運動してしまうシステムの性格の確認と、そのシステムの生き残りの可能性を、政治・行政的な専門家の手に委ねざるを得ない先進資本主義国の自省の一面を、良く現わしている。

### ④ハーバーマスの問題意識

ハーバーマスの行為理論は、労働（目的合理的行動）と相互行為（コミュニケーション行為）を重視するが、労働を重視するあまりに相互行為までも〈生産力-生産関係〉図式に還元してしまったマルクスとは異なり、労働よりも相互行為を重視する。なぜなら、相互行為に基づく制度的枠組みの変革が、「社会の成員に解放の進展と個性化の前進の機会」を提供し、相互行為を通じて人間性の回復を図ることを目標としているからである。

→行為の類型化を出発点としたため、いかにして個々の行為は妥当性をもち、相互行為を可能にし、社会システムの形成に貢献するのかという、「個人と社会との関係」の問題を克服できていないという、一見パーソンズにも当てはまる批判が適用できるように思える。

⇒パーソンズの行為理論：規範による行為の制御→相互行為の成立

ハーバーマスの行為理論：理想的発話状況の想定による発話行為の制御→合意の保証→相互行為の成立

相互主観性を前提とした討議による、行為者による共通の意味の共有を目的としたことにより、真の合意の妥当性を保証することになり、「個人と社会との関係」を克服することに理論上成功した。

ハーバーマスは、近代社会の危機的性格を合理化の進展に求めた上で、目的合理的行動が優位するシステムと、コミュニケーション行為が優位するサブシステムに分け、前者をシステムとし、後者を生活世界とし、社会の存続を図るために、外部自然に対しては目的合理的行動によって対処し、内的自然に対してはコミュニケーション行為によって対処するとした。そして、システムの同一性が保たれることをシステム統合とし、社会の同一性が保たれることを社会統合として、両者を区別した。パーソンズの分類に従えば、システム統合は経済・政治システムの部分に、社会統合は社会・文化的価値体系システムの部分に相当するとしている。

⇒一見すると、非の打ちようがないように思えるハーバーマスの議論だが、彼の討議による合意の妥当性の保証は、社会システムの部分に相当するのではなく、むしろ政治システムの部分にそうとうするのではないか。内部の部分間を調整するのに必要なのはコミュニケーションであり、「個人と社会との関係」の克服に必要な討議がシステム統合の部分に相当してしまったら、システムと生活世界が完全に切り離され、相互の関連性がなくなってしまう。これは、従来の社会システム論が置き去りにしてきた社会統合を重視するあまりの結果であろう。

### ⑤ルーマンとハーバーマスの違い

ルーマン：主体概念の排除という理論的関心をもとに理論構築している。

パーソンズの理論体系を方法論のレベルでラディカルにした。

ハーバーマス：主体性の回復という実践的関心をもとに理論構築している。

パーソンズの理論体系を社会理論および現代社会分析のレベルでラディカルにした。

## 7. コミュニケーション・コードの働きとそれに伴うシステムの変動 ～社会システム論の考察を中心に～

### コミュニケーション・コードによる不確定性縮減の働き

コミュニケーション・コードは、全ての行為者から等距離であることにより、公共性を有する。

交換とは、相互に他者が自由の一部を放棄することを条件に、自分の自由の一部を放棄することであり、コミュニケーション・コードによって、意識システムは、相互に恣意性を放棄して、他者が予期しない行為をする不確定性を縮減する。社会全体のシステムもまた、コミュニケーション・コードを通して、予期から逸脱した行為の諸可能性を排除することにより、社会秩序という低縮減性構造を可能にしている。

### ①文化的価値体系システムにおけるコミュニケーション・コードの働き

最も基底的なコミュニケーション・コードは記号である。記号とは、対象と意味を代表象する、言語よりも包括的なシニフィアン<sup>1</sup>の総称である。このコミュニケーション・コードを通して、意識システムは、自己の体験を独自に記号化する自由を相互に捨てて、他の意識システムとコミュニケーションを行う。情報交換は、社会全体のシステムを成立させる最も根源的な交換である。

文化的価値体系システムのコミュニケーション・コードは「民間」の範疇に分類される。これは、記号が、国家権力が消滅しても残存する、最も根源的なコミュニケーション・コードであることを示している。政治システム・経済システム・社会システムのコードが、例えば票・貨幣・法といった、国家権力によって規定されたモノであるのに対して、文化的価値体系システムのコードが、通常は国家権力が介入しない文法（語法をも含めた広義の文法）であることから、記号が政府発行のコミュニケーション・コードでないことは明白である。

システムは、記号を通して、有意味を選択して無意味を排除するという最も根源的な複雑性の縮減を行うのみならず、真を選択して偽を排除し、善を選択して悪を排除するといった価値選択をも行う。その際に用いられる他のコミュニケーション・コードも記号の一種である。この意味でも、記号は最も根源的なコミュニケーション・コードである。

記号のもう1つの重要な役割は、文化価値を保存することである。以上をまとめると、記号には、**交換媒体・価値尺度・貯蔵手段**という3つの主要な機能があると結論付けることができる。

### ②経済システムと社会システムにおけるコミュニケーション・コードの働き

自由と責任を相互承認し合う意識システムは、相互依存する不確定性の縮減を確実なものにするために、国家を建設する。国家権力に基づく貨幣や法は、それぞれ、ポジティブな価値の交換とネガティブな価値の交換を媒介する代表的な媒体であり、逸脱行為を減らす上での飴と鞭として機能している。

もしも、国家権力に基づいたコミュニケーション・コードがなければ、私たちは、物々交換によってポジティブな価値を交換し、復讐によってネガティブな価値を交換しなければならない。物々交換が成り立たないと、略奪などの不等価交換が頻発するようになる。このような犯罪に対して各人は私的復讐で不等価交換を等価交換にするほかないのだが、復讐は復讐を呼ぶので、等価交換はいつまでたっても成立しない。

物々交換には、自分が交換しようと思っている商品を相手が欲望しているかどうかという不確定性と相手が交換しようと思っている商品を自分が欲望するかどうかという不確定性がある。同様に、復讐には、自分の行為を相手が苦痛と感ずるかどうかがという不確定性と相手の反応がそれに対する報復であるのかどうかという不確定性がある。

もっと重要な問題は、物々交換においては、商品にどの程度の価値があるかに関して不確定性があるということである。一般的に言って、売り手は、買い手が望む以上に高いレートで交換しようとする。復讐においては、加害行為にどの程度の罪があるのかに関して不確定性がある。一般的に言って、被害者は、加害者以上に大きな罪を認めさせようとする。

コミュニケーション・コードがあれば、等価交換を容易に成立させることができる。物々交換における不確定性を縮減する交換媒体が貨幣であるのに対して、私的復讐における不確定性を縮減する交換媒体は法である。

貨幣は、商品の具体的な使用価値を捨象し、抽象的な価値一般を代表象するがゆえに、商品の価値を計測する基準となる。法は、犯罪行為の具体的な罪の内容を捨象し、抽象的な罪一般を代表象するがゆえに、犯罪行為の罪の重さを計測する規準となる。

貨幣には価値を貯蔵する機能があるが、法にも同様の機能がある。被害者が死んだからといって、加害者の「借り」が消えてなくなるわけではない。長い時間をかけた裁判を経た後であっても、刑罰は執行される。このように、ポジティブな交換において貨幣が交換媒体・価値尺度・貯蔵手段としての機能を持つように、ネガティブな交換において法は交換媒体・価値尺度・貯蔵手段としての機能を持つ。

### ③政治システムにおけるコミュニケーション・コードの働き

メタ政府のレベルでは、政府がどのような選択をするかではなくて、政府についてどのような選択をするかが問題となる。もしも、1人の独裁者が全ての政治的権力を独占しているとするならば、その国の政治システムは、相互依存的な複雑性を縮減するシステムではない。多数の国民が政治に参加できる民主主義国家では、政治システムは良いシステムである。

民主政治では、有権者は、国家の意思決定プロセスに参加する権利を持つ代わりに、決定事項に従う義務を持つ。これが政治システムにおける交換であり、この交換を媒介するコミュニケーション・コードが票である。直接民主制のもとでも、間接民主制のもとでも、多くの票を得ることにより、法や政策は採択され、正当性を獲得し、施行される。

市場経済と民主政治を比較すると、両者の共通構造が理解できる。市場経済においては、個々の消費者が選択した結果、多くの貨幣を集めた商品が生き残る。同様に、民主政治では、選挙というマーケットにおいて、個々の有権者が選択した結果、多くの票を集めた意思決定が生き残る。

→4つのコミュニケーション・コードについての分析を行ったが、一見すると異質な4つのシステムが、実は交換媒体・価値尺度・貯蔵手段としての機能を持つ同じ構造を持っているということが分かる。4種類のシステムは、独立したシステムではなくて、あくまでも1つの社会システムが呈する4つの異なる射影にすぎない。

⇒そして、サイバー空間レベルでは、交換媒体・価値尺度・貯蔵手段としての機能が、現実空間レベルよりもさらに拡大され、かつデータベースという名の万人に可視化された形で存在する。

### コミュニティとアーキテクチャーの二層構造

ポストモダンにおいても国民国家が消滅するわけではない。しかし、その役割は大きく変わる。インフラとしての国家は機能し続けるが、その機能は、かつてなく無意識化され不可視化されるようになる。そして、人々の社会生活は、脱国家的な多様なコミュニティに多重帰属しつつ行われるようになる。

<b>コミュニティの層</b> ：規律訓練型権力の作動域 多様な価値観の共存	<b>アーキテクチャーの層</b> ：環境管理型権力の作動域 価値中立的なインフラ
---	--

→ポストモダン社会は、価値観の多様性を理想とし、規律訓練の影響範囲を小さなコミュニティのなかに閉じこめてしまった。だとすれば、大きな秩序形成は環境管理で行うほかない。したがって、ポストモダンは、コミュニティの層とアーキテクチャーの層を分けることで、2つの権力の作動域や目的を切り離れた社会である。

サイバー空間レベル上のアーキテクチャーとして、「ゾーニング」（＝資格に応じてアクセス許可／不許可を設定する操作）と「フィルタリング」（＝アクセス者に「相応しくない」情報を予め排除する操作）などが新たな形の「権力」として浮かび上がることになるが、これは現実空間レベルの政治システムによって管理することで、「ゾーニング」＝一種の「境界線」の決定を政府の統制下から和らげることが可能となる。

### オートポイエーシス・システムの4つの特徴

<b>自律性</b>	：システムは自分におこるどのような変化に対しても、自分自身によって対処できる能力をもつ
<b>個性</b>	：システム自身でみずからの構成素を産出することによって自己同一性を維持する
<b>境界の自己決定</b>	：自己の境界を、産出のネットワークの中から自分自身で決定している
<b>入力も出力もない</b>	：システム内で自己完結する

→オートポイエーシス・システムは、作動することによりみずからの構成要素を産出し、みずからの境界を産出する

## 8. 現代社会のシステム統合によるグランドデザイン ～今までの議論を土台に～

<p><b>システム統合の一般理論</b></p> <p>A：分業体制による統合 資本による統合 フォーディズム的統合</p> <p>G：国家のイデオロギー的統合 政治システムの相対的自律性 政治システムによる経済システムの統合 福祉国家的統合</p> <p>I：社会的集団形成による統合 法整備による統合</p> <p>L：シンボルによる統合 イデオロギーによる統合</p>	⇒	<p><b>ポストモダン社会で利用可能なシステム統合理論</b></p> <p>A：分業体制による統合 資本による統合</p> <p>G：社会的集団形成による統合 法整備による統合</p> <p>I：政治システムの相対的自律性 福祉国家的統合</p> <p>L：シンボルによる統合</p>
--	---	--

上記のシステム統合理論を基に具体的に各種システムの働きを考えてみる。

### ・(現実空間の) 国際レベル…

- A：世界的資本主義を支えるための各種サービス業の連帯、製造業の分業体制、適正かつ開かれた市場の形成
- G：世界規模の社会的機構の創出、正の志向を基にした国際憲章の整備
- I：経済対立・経済格差・社会対立・社会格差の問題解決としての権威的政体、各システムの補助的役割
- L：多元的多文化主義

### ・(現実空間の) 国内レベル…

- A：資本主義を支えるための国内分業体制、適性かつ開かれた市場の形成
- G：国内規模の社会的組織の創出、正の志向を基にした国内法整備、多文化主義を支える教育制度の充実
- I：経済対立・経済格差・社会対立・社会格差の問題解決としての権威的政体、各システムの補助的役割
- L：多文化主義

### ・サイバー空間レベル…

- I：データベースによる情報下での善の志向を基にした討議、現実空間にフィードバックするための具体的政策案形成
- L：討議や政策形成を可能にするデータベースの充実と（ログイン後の）開かれた情報公開

### ・行為者の意識レベル…

- 現実空間レベルのA・G・Lシステムへの真摯な参加の志向
- 現実空間レベルのIシステムやサイバー空間レベルでの、他システムの環境変化を目指した積極的関与の志向

## 9. 今の我々に出来ることとは何か ～終わりにかけて～

## 【参考文献】

- 富永 健一『日本の近代化と社会変動』講談社学術文庫、1990年  
富永 健一『近代化の理論』講談社学術文庫、1996年  
東 浩紀『動物化するポストモダン』講談社現代新書、2001年  
東 浩紀・大澤真幸『自由を考える』NHKブックス、2003年  
東 浩紀「情報自由論」『中央公論 2002年7月～2003年10月』  
ジャン＝フランソワ・リオタール著、小林康夫訳『ポスト・モダンの条件』水声社、1989年  
ジャン＝フランソワ・リオタール著、管啓次郎訳『こどもたちに語るポストモダン』ちくま学芸文庫、1998年  
ジャン・ボードリヤール著、今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店、1979年  
ジャン・ボードリヤール著、竹原あき子訳『シミュラクルとシミュレーション』法政大学出版局、1984年  
中野 収『メディア人間』勁草書房、1997年  
中野 収『メディア空間』勁草書房、2001年  
ローレンス・レッシング著、山形浩生・柏木亮二訳『CODE』翔泳社、2001年  
岡本 裕一朗『ポストモダンの思想的根拠』ナカニシヤ出版、2005年  
ジル・ドゥルーズ著、宇野邦一訳『フォーコー』河出書房新社、1987年  
ジル・ドゥルーズ著、宮林寛訳『記号と事件』河出書房新社、1992年  
ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ著、宇野邦一訳『千のプラトー』河出書房新社、1994年  
ミシェル・フーコー著、田村俣訳『監獄の誕生』新潮社、1977年  
ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳『性の歴史1』新潮社、1986年  
アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート著、水嶋一憲ほか訳『帝国』以文社、2003年  
友枝 敏雄『モダンの終焉と秩序形成』有斐閣、1998年  
小笠原 眞『理論社会学への誘い』有斐閣、1993年  
タルコット・パーソンズ著、永井道雄他訳『行為の総合理論をめざして』日本評論社、1960年  
タルコット・パーソンズ著、佐藤勉訳『社会体系論』青木書店、1974年  
タルコット・パーソンズ著、田野崎昭夫監訳『社会体系と行為理論の展開』誠信書房、1992年  
ニクラス・ルーマン、ユルゲン・ハーバーマス著、佐藤嘉一ほか訳『批判理論と社会システム論上』木鐸社、1984年  
ユルゲン・ハーバーマス著、長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』紀伊國屋書店、1970年  
ユルゲン・ハーバーマス著、細谷貞雄訳『晩期資本主義における正統化の諸問題』岩波書店、1979年  
ユルゲン・ハーバーマス著、脇圭平ほか訳『コミュニケーション的行為の理論』未来社、1987年  
杉田 敦『権力の系譜学』岩波書店、1998年  
杉田 敦『境界線の政治学』岩波書店、2005年